

雲南省の神像呪符「^{ジャーマーツ}甲馬子」に生きつづける中国祭祀版画の祈りの世界

川野明正

明治大学法学部

雲南の神像呪符「甲馬子」について

冥界通信メディアとしての神像版画

かつて中国では神々の像を粗末な紙に刷った版画があり、年中行事や祖先祭祀、あるいは日常生活で必要となるさまざまな願い事に使われていた。この種の版画は、「^{チーマー}紙馬」、「^{センマー}神馬」、あるいは「^{ジャーマーツ}甲馬子」（雲南省での呼称）とも呼ばれていた。この種の祭祀版画を本論では、全国的に知られる呼称「紙馬」に代表させて、紙馬類と総称することにする。

紙馬類の役割は、願い事の対象となる神に祈りを捧げることである。使い方は、紙で出来た模造銭「^{チーチエン}紙銭」とともに火をつけて燃やすというもので、その意味は、煙とともに幽明を異とする神々の世界や死者の世界に人々の願いを伝えることである。この種の版画は、神々や死者と交流するための通信手段で、いわば中国の人々の信仰を支える大切な「冥界通信メディア」だったのである。

「甲馬子」とは雲南省西部大理白族自治州で使われている呼称である。1960年代後半から1970年代前半まで続いた文化大革命の十年の動乱と混乱の時代に中国各地の神像版画は破壊され、一部の地域を除いて残っていない。近年まで、これらの神像版画はともすれば「封建迷信用品」と規定され、市場で堂々と販売することがはばかれるものであった¹⁾。しかし、雲南省の人々は過去、版木を土中に埋め、屋根裏に隠し、あるいは近年になって記憶を頼りに新たに版木を製作し、神像版画に描かれた神々の世界を守り続け、いまでも続々と新しい内容の版画が登場している。これらは中国の伝統的な民間信仰の有り様を現代に生き生きと伝える貴重な民俗資料であり、中国の人々が心に秘めたさまざまな祈りを映し出す鏡である。

神像版画を伝える人々

神像版画は、もともと漢族の信仰習俗である。甲馬子も雲南省の3分の2の人口を占める漢族が使っており、雲南省全体で40の市や県にわたって分布している。また、雲南西部に居住するペー族（白族）が、大理白族自治州（以下「大理州」と表記）全域でこの種の版画を使っている。ペー族の言語は、チベット・ビルマ語族の言語支系であるペー語支に属するとされるが、明朝より科挙を受験して官僚となる者も多く、外来文化の受容に長けた民族であることも、神像版画を使用する背景にある。このほか、同じくチベット・ビルマ語族の民族では、ナシ族・リス族・イ族など、イ語支の言語支系に属する民族に使われている。ナシ族とリス族は雲南省西北部に居住しているが、イ族では西北部の山地民ではなく、雲南東部、とくに昆明周辺に住むサメ人・子君人など、平地居住型のイ族のサブ・グループの人々の間に神像版画の習俗がみられる。このほか、雲南西北部に居住するチベット族がこの種の神像版画を使っている。

紙馬類の起源——神像版画・呪符・紙銭 紙馬舗

中国の紙馬の歴史をたどってみよう。

かつて北京・無錫・蘇州といった都市ではこれらの神像画を版刻する紙馬舗と呼ばれる工房を備えた店があり、庶民の祭祀の需要に役立っていた。たとえば北宋の都、開封の生活を回顧した宋・孟元老の『東京夢華録』は、春の墓参行事である清明節の記事に、「紳士も庶民も墓参りに出かけるため、都の門は人で塞がりそうな有り様になる。どこの紙馬舗でも、紙の張ぼて細工で樓閣の格好を作ったのを通り道で売り出す」（巻七「清明節」）とある²⁾。

また北京では現在でも芝麻胡同と呼ばれる路地

が地名として残る。これは「紙馬」の発音と胡麻をあらわす「芝麻」の発音がともに同じために地名となったもので、明代以降紙馬版刻の手工業者の工房が軒を連ねていた³⁾。その生産枚数は、中華民国期に浙江省の「馬張」と呼ばれる神像呪符を調査したディによれば、当時販売者一軒あたり年間一万枚の神像を生産していたという⁴⁾。

紙馬類の成立と紙銭

紙馬類の成立については、さまざまな起源が考えられる。まず神像を描いた版画という意味では、中国の木版印刷の歴史と軌を一にする。唐代、咸通九年(868年)刻印の『金剛経』の巻首に描かれた「釈迦牟尼説法図」や、成都で製作された『陀羅尼咒本』が木版神像画の最古のものとして知られる。これらの經典に描かれた仏像のほかにも、たとえば、民間信仰に用いられる各種の呪符もその起源の一つである。祈願対象の神像を描いた呪符についていえば、祭祀対象となる神に祈願を伝えるという意味では、紙馬と同様の意味をもつだろう。現存最古のものは、敦煌文書『護宅神曆卷』(敦煌文書番号:Pelliot3358)に載せる「安心符」「樹神符」などで、樹神や驅鬼の神像を手描きしている。陶思炎氏はこの種の呪符が、唐代に流行した木刻の仏教經典などとともに、後世紙馬類の起源の一つであると指摘される⁵⁾。

これらの紙馬類は、冒頭に述べたように「燃やして使う」という点に特徴がある。煙に変形させて祈願を伝達するという方法は、もともと神々や先祖の冥界での生活費に使う、紙で出来た模造銭「紙銭」と同じ用法である。

紙銭は、『新唐書』卷一百九「列伝」第三十四「王璵伝」に、「漢代以来葬祭には皆瘞銭があり、後世の里俗では紙を銭に寓して鬼事(死者の祭祀)に用いた」とある。瘞銭は銭を埋葬の際にともに埋め、死者の用とした。魏晋時代の頃より行われ、この種の模造銭は、遅くとも宋代には燃やして使用する習俗が盛んになっている。

台湾では、紙馬類に相当する神像版画を「紙符」と呼ぶ。これらは竹で作った竹紙を材料とし、図案も紙銭の類に似て、冥界に送る金や銀を象徴する金銀紙や、紙銭類に神像を刻印したものといえる。また、雲南省では、この種の神像呪符は西部の大理州大理市喜洲鎮、あるいは中部の昆明市で

は「紙火」と呼ぶが、これは紙銭を意味する言葉である。

ここで大事なことは、紙銭と紙馬類は、燃やすという用法が共通するだけでなく、その性格も連続している点である。つまり、冥界に送る紙銭に、神像を加えて、祈願を送る対象を特定すれば、それが紙馬類のジャンルとして成立する。紙馬類に描かれた神像は、いわば祈願の対象となる神を記すことにより、紙馬類を燃やす際の「宛先」として機能している⁶⁾。

そのため紙銭と紙馬類は煙に依存するメディアとしての共通性がある。台湾の紙銭を研究された蘇素卿氏は、燃やすという変形をとまう行為が重要な意味をもつと指摘される⁷⁾。紙銭も紙馬類もともに神界や冥界という不可視の世界へ送付するという目的に使われる以上、現物をそのまま送るのではなく、煙と化すという変形を契機として、送付物を不可視化し、幽明を異とする異次元の世界に送る機能を果たすのである。

「紙馬」名称考——馬の信仰文化との関わりから

供儀との関係

このように、經典上の神像版画や、呪符、紙銭といった存在が、紙馬類の成立に影響を与えているにしても、紙馬類はそれらにない特徴もある。それは「馬」という字が含む意味である。

岩井宏実氏によると、日本の絵馬は、もともとは、馬を犠牲にする風習から、石や木の馬形を使うようになり、金銭的にその余裕がない者が馬形の代わりに絵馬を奉納したといわれる⁸⁾。

興味深いことに、中国の紙馬も日本の絵馬と同様に、馬を犠牲に捧げる習俗から転じて成立した経緯がある。中国ではたとえば河川の氾濫を防ぐために、河神である河伯に白馬を献上したように、馬を神の犠牲とする習俗がみられた。つまり、供儀の習俗も紙馬類の起源の一つである。古代中国ではかつて、天子などが諸々の神を祭祀するのに、馬を犠牲に捧げているが、のち漢代には、生きた馬ではなく、木製の馬などに替えて祭祀した。

『漢書』「郊祀志」に太初二年(紀元前103年)のこととして、祭祀の様式を改革した記事があり、「若駒は木製に代えられたといわれる。またあちこちの名山や大川の祭りで若駒を用いる時もすべ

て木製のものに代え、ただ巡幸の途中で天子が親しく祀る場合のみ若駒を用いた。その他の祭り方は元のままとした」とある⁹⁾。これまで神々の祭祀には馬を犠牲として捧げていたのを、漢代には祭祀を司る祠官が山川の神を祭祀するときは木馬を馬を犠牲にする代わりとして捧げ、天子みずからの祭祀の場合のみ生きた馬を犠牲とした。

永尾龍造は紙に神像を版刻した紙馬類も、もともとは犠牲として神前に馬を描く絵柄であったと指摘し、清・王棠『知新録』巻八(民国時期の辞典である『辞源』に引く)の紙馬を「唐の明皇(玄宗皇帝)鬼神を瀆(祭祀)し、王璵紙を以て幣(祭祀用の御幣)となし、紙馬を用いて以て鬼神を祀る。すなわち禺馬(木製の馬)の遺意(名残の意味)なり」とする説を受けて、紙馬の意味について、馬を犠牲にする代わりに用いられた木禺馬の代用とする¹⁰⁾。

神々の乗り物としての説

何故神々に馬を生け贄として捧げたかという理由も、紙馬の役割を考えるうえで大切な問題である。神々に馬を送る目的は、馬を神々の乗り物にするためであろう。

中国では古来より馬は神の乗り物であった。出石誠彦の「天馬考」に記されるように、『楚辞』「離騷」「東皇太一」や『淮南子』「天文訓」には馬が太陽を載せた車を引く観念が語られる¹¹⁾。

神々の乗り物として紙馬類を使う習俗は、紙馬類のもっとも早期の記録の一つと思われる唐代の歳時記、『輦下歳時記』(著者不明、『說郛』巻六十九収録)に、かまど神の祭祀を記し、「竈馬」と呼ばれる版画を用いたことが書かれる。「都の人たちは、年夜(除夜を指す)となれば僧侶や道士を呼んで経を唱えてもらい、酒と果物を供えて神を送る。竈馬をかまどに貼り、酒糟を竈門のうえに塗る。これを醉司命という」とある。

かまど神は一名「司命竈君」といい、年の暮れに天に上がり、天上にある神々の朝廷に赴いて、家庭の一年の行いを報告する。天帝は、かまど神の報告に基づき、翌年の禍福吉凶の運勢を定め、年明けとともにかまど神を地上に帰すのである。

かまど神を送り出すとき、人々はよい報告をしてもらい、悪事を伝えることがないよう、かまど神を酔わせて送った。この習俗は現在でもかまど

神の口に口封じの飴を塗るなどのやりかたで中国各地に伝わる。「竈馬」と呼ばれるこの神像呪符は、入矢義高氏と梅原郁氏による『東京夢華録』の記注によれば、「摺箔の紅紙に竈神の像を木版で印刷したもの。一年ごとに取り替える」(明・馮应京『月令広義』の記述による)とある²⁾ [p.346]。かまど神の図像が描かれた版画であるが、たんに名称として馬の字を当てるだけではなく、かまど神の乗騎として、馬の像も描いたであろう。

神の乗騎として馬に託した図版を使うという考え方は、その後紙馬類の基本的な意味として受け継がれる。なお、吉田隆英氏は紙馬の語の早期の出典として、『太平広記』巻三百「神」+「王昌齡」の条(出典、唐・谷神子『博異志』)に、唐代の詩人、王昌齡が廟内の神に捧げたものとして「紙馬」が記されている旨を指摘される。神々に送る馬像としての性格が見て取れることが注目される。吉田隆英氏が指摘されるように、それが船内に祭祀のためにあらかじめ準備され、黒白のまだら毛の馬を毘靺奴(西域出身の奴隷)が牽いていると詩に描写されている様からみれば、これは張り子の馬ではなく、紙上に描かれた馬像であったものであるらしく、神の乗騎として神前に馬を捧げた馬像画であろう¹²⁾。

神々の依代としての説

また、紙馬については、次のような解釈もある。明末清初・虞兆隆の『天香楼偶得』は、紙馬の解釈として、「世間では紙に神仏の像を描き、とりどりの色に塗り、祭祀に使用しておわれば焚く。これを甲馬といい、この紙を神の依代とするが、馬に似る」(「馬字寓用」と説明している。紙馬の依代としての性格を指摘した点、注目すべき説を唱えている。

その一方、清代の著名な考証学者、趙翼(1722～1812)の『陔余叢考』巻三十は、『天香楼偶得』の依代としての説を批判する形で、同じく明末清初の人物である王通『蚓庵瑣語』の目撃談を引用している(以下は『蚓庵瑣語』原文の引用による)。

「世俗の祭祀では、必ず紙錢、甲馬、雲鶴(神の乗騎とする鶴を描いた版画)を燃やす。少しでも見識のある者はみな、無益な物であるという。近頃私は穹窿山(現在の江蘇省呉県境内)に行き、施煉師(名は亮生・道士)が、温元帥(道教の神。

四大元帥の1位)を招いて下して童子の身体にのりうつらせたのを目にした。祭祀が終わって去っていただこうと、甲馬をつづけて数枚燃やしたが、帰ってくれなかった。施煉師が、馬はたくさん献じたはずであるといったが、温元帥がいうのには、馬の足に欠陥があるので、乗騎とするのに役立たないという。そこでまだ焼いていない図版をみると、その部分の版木が折れて壊れており、馬の足が断たれてつながっていなかった。そこで筆で描いてつなげると、元帥は去った」。

趙翼はこの記述から、「そうであるならば、すなわちかつて神を紙に描くのに、みな馬を描いて、乗騎の用に当てた。それゆえ、紙馬と称する」(卷三十、「紙馬」として、紙馬類の役割は『天香楼偶得』のいう依代としての意味ではなく、神々の乗騎にあると主張する。だがじっさいの用法をみると、これらは『天香楼偶得』がいう神々の祭祀の際の依代、形代としての意味もあり、『陔余叢考』がいうように、人々の祈願を届け、あるいは神々の乗る交通の道具として、馬の意味に異界と此界との往来の作用を託す面ともにある。祭祀の際は依代、形代として機能し、祭祀が終わったあとや祈願を送る際、神を招く際にこれらの図版を焼くことにより、祈願伝達や神々の交通を担う乗騎の機能も果たすのであるといえる。

縁起物としての馬と宋代の年越し習俗

このように、中国の紙馬類がいずれも馬の字を含むことは、かまど神に捧げられる竈馬がそうであるように、神々の乗騎であり、そのために捧げられる献上物でもあるためだからである。

中国の紙馬類は、宋代には北宋の都、開封や、南宋の都、杭州(臨安府)などで、紙馬鋪という工房兼販売店があり、さかんに販売されていたが、記録に残る紙馬類の名称には、馬・ロバ・鹿など、やはり馬や動物を描いたものがある。

『東京夢華録』は、「歳暮に近づくと、町ではどこにも門神・鍾馗・桃板・桃符や、財門鈍驢さいもんどんろや回頭かいとう(みかえり)鹿馬ろくばや天行帖子てんこうちょうじを印刷したのを売りだす」と記す(卷六「除夜」)。「財門鈍驢」「回頭鹿馬」という名称は、ロバや馬の像を描き、財産や禄(給料、つまり官僚としての榮達を意味する)を家に持ち来る作用を馬像に託す。回頭鹿馬とは、「鹿」を当てて同音の「禄」の意味をあら

わしている。南宋の江蘇地方の繁榮を記録した呉自牧『夢梁録』卷六は、年の暮れに紙馬鋪さいばが売り出す紙馬類に、「財馬」「廻頭馬」などの財運繁榮の祈願に使われた馬像を記す。あくまで『東京夢華録』を模倣した文体であるが、「歳のはじめが近づくと、街の露店は門神・桃符・迎春牌兒げいしゅんはいじを描き、紙馬鋪は鍾馗、財馬、廻頭馬などを印し、顧客に贈る」と記す。

紙馬類のなかに占める馬像版画の役割は、宋代の民衆の民間信仰世界で大切な役割をもっていた。これらの馬像版画は、たんに神々を送り迎えるだけではなく、「財門鈍驢」「財馬」など、財運をはじめとする幸福を招き入れるための縁起のよい馬やロバたちであった。

雲南省の神像版画「甲馬子」

馬像版画の役割 (写真1・2)

雲南省に広く流通している「甲馬子」と呼ばれる版画も、この種の紙馬の一種類である。

おもしろいことに、雲南省の甲馬子は、内地の紙馬類がそうであったように、馬の役割に人々の祈りを託すという性格が強く残る。祭祀ごとに対象となる神の神像版画を燃やすが、雲南省西部の大理州大理市喜洲鎮や南潯彝族自治州や保山市隆陽区の習俗では、これら神像版画とともに馬像のみを描いた「甲馬ジャーマー」と呼ばれる馬像版画があり、これを燃やすことによって初めて祈願が対象となる神に届くという。そればかりではなく、口寄せ巫女が、死者の魂を此の世に呼ぶために馬像を燃やしたり、亡くした物を取り戻すために馬像を燃やしたり、この世に祟る鬼類を送り出すために燃やしたり、子供の病気の原因が、外でつまずいたり、驚いたために魂が体外に落ちたと解釈された場合、落ちた魂を呼び戻す魂の乗り物として燃やされる。雲南省では、こうした馬のもつ役割がいっそう重じられて、幅広い役割が雲南省の馬像版画に託されている。雲南省大理州で神像版画が「甲馬子」と呼ばれるのは、もっとも重要な役割をもつ馬像版画そのものが「甲馬」と呼ばれているからである。

雲南での甲馬子の歴史

しかしながら、雲南省での甲馬子の歴史はそう古い物ではない。現存の版木でもっとも古い物は



写真1 「追魂馬」

大理州南澗彝族自治州南澗鎮・黄紙墨刷・19.0cm × 14.1cm (以下、寸法は縦・横順に記した)。魂呼び儀礼用の馬像呪符で、この種の馬像を「甲馬」と呼ぶ。

清代の乾隆(1736-1795)・嘉慶年間(1796-1820)のものであるという¹³⁾。明末から清初にかけて、雲南でも木版印刷による出版業がようやく繁栄するが、甲馬子が雲南で生産されだしたのも、この時期を外れないはずである。明代初期から中期までは、木版印刷技術の伝播という観点からみれば、雲南省で甲馬子が積極的に生産されていたとは考えられにくい。

雲南にはかつて漢代の滇国^{てん}、唐代の南詔国^{なんしやう}、宋代の大理国などの王国が栄えていたが、雲南省はもともと少数民族の居住地である。甲馬子が広く流通しているペー族^{ペー}は、南詔国・大理国の主だった構成民族である白蛮^{はくばん}の末裔である。雲南省にこの種の神像版画が広まったのは、内地からの漢族移民の入植が背景にある。雲南省は大理国を滅ぼしたモンゴル軍の支配下に入る元代以来、中国の歴代王朝の版図に組み込まれるが、とくに明代のはじめに明朝初代の皇帝、朱元璋(洪武帝)が辺疆防衛のために軍隊を派遣し、内地の漢族を大量に各地に入植させる。かくして山間に開けた盆地

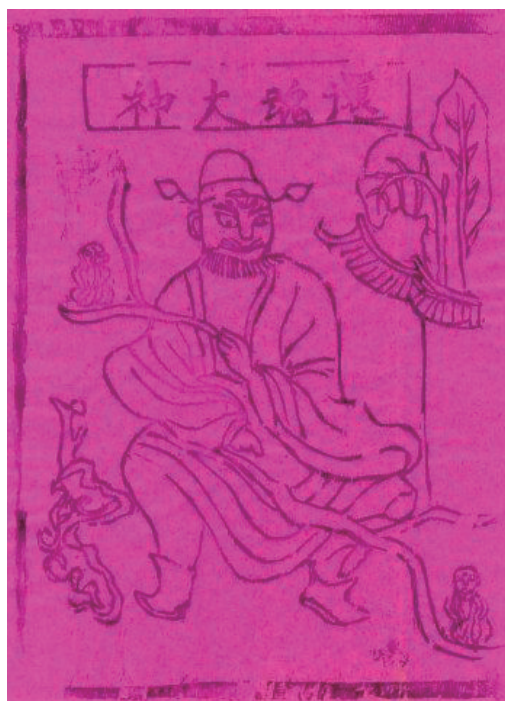


写真2 「還魂大神」

大理州南澗彝族自治州南澗鎮・薄紅紙墨刷・19.9cm × 14.3cm

魂を還す神を描く、卵を手にとって病人の名を呼び、魂が返ると卵が独りでに立つという。魂呼び儀礼では他に「山神・土地」「司命龍君」(かまど神)の神像が組み合わせられる。右手の先に病人の魂、左手の先に病人の姿を描いている。

に点在する雲南省の主要都市が漢族の居住地となるが、このような漢族の居住地域を「漢朝地^{ハンチャョウチー}」という。雲南省は漢族のフロンティアとなり、ミャンマー・ベトナム・ラオスにかけて広がる先住民民族地域「夷方^{イーファン}」と対照的に、辺疆の地に漢族の伝統文化も移植され、独自に発展してゆく。雲南省の甲馬子が分布する地域は、雲南中部の省都昆明、中南部の通海、南部の建水・石屏、西部の大理、保山、騰衝などの都市とその周辺の農村であり、漢族居住地が中心である。

もともと移民である雲南漢族が、日常生活の必要から、これらの神像版画を内地での習俗にもとづいて生産したことが、甲馬子の起源であろう。

雲南少数民族と甲馬子

雲南省の甲馬子は、ペー族をはじめとして、ナシ族・イ族・チベット族・リス族など、少数民族にも使われている。密教系の仏教信仰が隆盛を極めた南詔国の時代以来、ペー族は歴史的に外来文化の受容を得意としてきた民族であるが、大理地方に移住してきた漢族と同居するうちに、みずからの信じる神々たちも甲馬子に表現することになった。雲南西北部麗江市に居住するナシ族も、チベット文化や中国伝統文化の受容を得意とし、同じく外来文化の受容を得意とするペー族とともにかつて官吏の登用試験である科擧の合格者を多く輩出している。イ族の場合はほとんどが山地でソバ栽培をする民族であるが、たとえば雲南省の省都昆明市の雲南最大の湖、滇池に広がる盆地に居住し水稻耕作をするサメ人・子君人などのサブ・グループが甲馬子を使う。代々漢族と隣接してその文化的影響を受けてきた民族集団が甲馬子を使う。

その一方で、これらの民族のなかに甲馬子が受容された背景に、それぞれの民族の伝統的な宗教文化がある場合も多い。ペー族やナシ族はそれぞれトゥーシーボー、トンバと呼ばれる民間宗教の祭司がいるが、これらが甲馬子を儀礼に使うこともある。もともとこれらの民族には祭司が儀礼のために用意する宗教画の伝統があり、儀式が終わると燃やすなどして神を返した。あるいは雲南省西部のミャンマー国境地帯に居住するリス族の場合は、旧暦二月八日に天を祀る祭天の儀式を行う場合に、馬像版画を使用する。リス族の祭司は、刀でできたはしごを一步一步天に向かってあがってゆき、天神に祈りを捧げるが、はしごの両端に馬像版画「甲馬」を並べて貼り、馬像は孔雀の羽をもつ天馬として描かれ、人々の願いを天に伝えてゆく。馬像の役割が、天を祀るリス族の宗教伝統と相性良く受容されている。また、幾つかの版画は、漢族の版画とは異なるリス族の神々を描いている。

また、雲南西北部のチベット族は、旧正月には門の鴨居に「利市仙官」と「招財童子」の版画を門の鴨居に貼るが、これは内地で年越しに門に貼る「掛箋」と呼ばれる木版画や切り紙と同様の習俗が、漢族の財産繁栄の神である財神信仰とともに受け入れられたものである。しかしながら、

雲南チベット族はチベット自治区や青海省のチベット族同様、チベット仏教の寺院に、神々に祈りを捧げる馬像を印した「風馬」(チベット族語「ルンタ」)を奉納する習俗もみられ、宗教用版画の伝統も背景にある。甲馬子が、ルンタの信仰習俗と隣接した雲南省で馬像呪符を今日に伝えている点はいへん興味深い。

甲馬子の製作者と販売者

雲南甲馬子の特徴

馬像版画が重要な役割をもつという特徴のほかに、雲南省の甲馬子には、他の地方の紙馬類にみられないいくつかの重要な特徴がある。まず、版画の持ち味として、神像の表現がときには稚拙とすらいえる出来映えで、製作者が思うに任せて版木を彫ったかのような自由自在な描線の特徴としていることがあげられる。北京・開封・無錫など、他の地方の紙馬類は、緻密な描線で動かし難い体裁と構図で彫られている。これは、これらの都市で製作されていた紙馬類が、紙馬製作を代々生業とする専門の職人の手によって製作されていたのに対し、雲南の甲馬子は、主として農民の手によって、専門の職業集団の手を経ずに生産されたからであろう。雲南省の甲馬子の製作は、中国の伝統宗教である道教の職能者である道士などが携わることも多いが、彼らにしても農民などが副業として道士となっている。ただし、清代の版木では、雲南西部の騰衝県の物が緻密な体裁を保っているように、書籍や印鑑版刻業者など、専門の職人に依頼して製作された版木も多くあり、一概には言えないが、少なくとも内地の紙馬鋪が、一代一代揺るがせにできない製作上の決まり事を口伝で伝えていたような、厳格な専門職業集団内部での製作技術の伝授があったものは少ない。

雲南の甲馬子は、自由奔放ともいえる造形が持ち味である。これは一方で、当事者たちが、現地で必要となる民間信仰上の神を、必要に応じて版画化する必要があったこととも無縁ではない。甲馬子の販売者は、農民が多く、各地に立つ市で行商したり、市街にある紙製品の販売店に卸して売るか、あるいは紙製品店の経営者が版刻して売る場合もあるが、いずれも周囲の少数民族の信じる民俗神や、その土地独自の祭祀習俗を反映したものを販売している。とくに大理地方のペー族の間

に使われている神像版画などは、もともと見本となる神像などあるはずもなく、ペー族の製作した甲馬子には、ペー族独自の前掛けと頭巾の民族衣装を着た民俗神たちが、ときには踊り、ときには微笑み、ときには怒りの表情を浮かべて生き生きと描かれている。

保山市の神像版画「神馬紙」の製作者と販売者(写真3・4)

ミャンマーと国境を接する保山市は、域内に怒江(サルウィン河)、瀾滄江(メコン河)の2本の大河をもつ。怒江東側では、市政府所在地である隆陽区・施甸県・昌寧県、怒江西側では龍陵県・騰衝県と、すべての区・県にわたり神像版画が広範に分布している。保山市から西隣の徳宏傣族景頗族自治州にかけては、この種の神像版画は「神馬紙」と呼ばれている。

隆陽区や騰衝県では、他の地方では現在ほとんど見られない版木の製作者がおり、隆陽区では少なくとも2人の専門の版刻業者がいる。『中国民間木版画集成——雲南甲馬卷』によれば、板橋鎮の張元文(漢族・1953年生)さんは足が不自由なため、師匠について版刻を学んだという。1980年代からはじめて80余り500種の版木を版刻したという¹⁴⁾。隆陽区では販売者が版木を版刻することは少なく、業者から1枚30元ほどで購入する。隆陽区では政府所在地の永昌鎮内の明強街は仏具店など数軒で紙像版画と紙銭を売るほか、数人の婦人が露店を出しているが、彼女らの多くは5km先の板橋鎮から販売しに來ている婦人が多い。板橋鎮の青龍街やミャンマー華僑に信仰を集めている臥仏寺に販売者が集中しているが、いずれも版刻業者から版木を購入している。

騰衝県は、雲南とミャンマー北部を隔てる高黎貢山沿いの界頭・曲石両郷と、県政府所在地である騰越鎮に販売者が多い。

騰衝県文物管理所の賈志偉氏は、長年県内の神像版画の収集・研究を行い、騰越鎮郊外のミャンマー華僑の郷として知られる和順郷に「騰衝神馬芸術展覽館」を開設している。賈志偉氏の御教示によると、いちばん古い版木は曲石郷の版木で、道光二十七年(1847)製作で、「文昌帝君」(道教の学問の神)を描く物である。ちなみに確実な年代が見て取れる印刷物は、清・乾隆年間の『騰越



写真3 騰越鎮許家紙舗で店先に立つ段生英さん



写真4 許家紙舗での印刷場面

州志』である。この地は製紙業も盛んで、清初にはじまったとされている。騰衝県の神像版画は、他地が雑紙に刷られているのに対し、棉紙と呼ぶ伝統的な漉き紙に刷られている。中華民国期には幾つかの工坊があって神像版画の印刷をしてい

た。いまでも県内外各地で販売されている。

騰越鎮には許家紙鋪という紙貨販売の店舗があるが、神像版画と紙銭の販売が主である。この紙鋪は、現在雲南省で最大級の神像版画の販売店である。那須塩原市那須野が原博物館の金井忠夫館長が雲南神像版画の調査を行った際にこの店を取材しており、金井館長の御教示を受けて2008年と2009年、筆者も訪問してみた。

前出の賈志偉氏によると、まず先代の許多禎さんが民国期に他の紙鋪の手伝いをし、のちに独立して許家紙鋪を開業した。文革のときには中断していたが、許洪玲さん（女・45・年齢は2009年現在）の兄、許存孝さんと嫂の段生英さん（81）が1980年になって、ふたたび神像版画の販売をはじめた。騰越鎮でいちばん古い紙鋪は、「金發号」で段金廣がはじめて6代目であったが、いまは神像の販売はしていないという。許家紙鋪では、版木は神像版画だけで20種あり、近年増加した神像版画の種類も多く、「平安神」「黒神」「家神」「勾絞」などは10年前に訪問した際にはこの地にないものであった。騰衝県内ばかりでなく、隣県の梁河・盈江両県（徳宏傣族景頗族自治州）の紙貨店にも卸売りされており、流通範囲は広範である。また、許家紙鋪の神像版画は、一般の人々が家庭での祭祀で使うために購入するばかりではなく、「道師」と呼ばれる民間道士たちが、儀礼用にまとめて求めることも多い。

許家紙鋪では、版木は製作しておらず、郊外の版刻業者から購入する。だいたい3万枚も刷ると版木は摩耗してしまうので、版木を交換するのである。材料は雲南各地と同様に梨木（冬梨木）である。ここには3人ほどの従業員が常時神像版画を刷っている。

他地では版木の上に紙を置いて、墨を筆や刷毛で塗ってから手で刷っていくのであるが、金井忠夫氏が指摘するように、許家紙鋪での刷り方は、「年画」と呼ばれる年越しなどに貼る吉祥版画と同様な本格的な刷り方をしている。「版木を台に置きその下には板木の四隅に墨を含んだ紙で版木に固定している。一方、用紙は100枚を1束とし直方体の大きな石を重石代わりにして、紙を固定する。紙は直方体で、左右2面を摺れるように、片側100枚を摺り、終わると反対側を摺る」というものである¹⁵⁾。シュロの樹皮を巻いた刷毛と、

シュロの樹皮を板に固定したバレンで手慣れた手さばきで刷っていく。1枚するのに1秒程度の時間で大量に刷っていく。

騰衝県の神像版画には、中華民国期の門神（年越しの際に門扉の左右に貼られる門上の守護神）の版木がある。これらは賈志偉氏が界頭郷で収集したものである。大柄で長さ40cm、幅20cmを越える寸法で、内容も「穆桂英」「楊宗保」（明代の『楊家将演義』の登場人物）、「唐僧」（三蔵法師）「孫行者」（孫悟空）「沙悟浄」「猪八戒」など、他の地に見られない独特の門神像がある。これらは年越しの吉祥版画である「年画」の範疇にも入るものであり、中華民国期まで、「騰衝年画」とも呼びうる木版画文化が存在していたことを証している。

賈志偉氏によると、優れた版木は大理州劍川県の木匠（建築業者）が版刻したものであるという。劍川県は雲南省西部にあって、東部の通海県のモンゴル族とともに建築業の出稼ぎで知られた県である。雲南の甲馬子の普及と様式化に劍川県の甲馬子が大きな影響を与えたことは大いに考えられる。劍川県と隣県の鶴慶県は、今でも手描き彩色による家畜神の神像が見られるが、木刻版画で描線を出したうえで色を塗る手法は、騰衝県の門神にも共通している。

また、騰衝県は各地で皮影戲と呼ばれる影絵劇が盛んで、これも雲南各地とは一線を劃す伝統芸能である。騰衝県の神像版画には、一見して皮影戲の影絵人形の影響がはっきりとみられる人物像が一部にみられるが、製作者が共通していることが考えられる。

騰衝県の神像版画は、雲南甲馬子の発展過程を考える上で有益な数多くの特徴があることを強調しておきたい。

甲馬子にみる祈りの世界

日常生活での祭祀（写真5）（図1・2・3）

雲南の甲馬子は、人々にとって生きた生活の道具である。人々の祈りの数だけ甲馬子があるといつてよい。ここで甲馬子をどのような場面で使うのかという点から、雲南の人々の祈りの姿をみてみることにしよう。

大理州のペー族は「本主」（ペー族語では「ウズ」と呼ぶ）と呼ばれる村神を村ごとに祀る。村神を

祀る本主廟は、ペー族の人々の生活を守る大切な神々が祀られている。それをみれば、ペー族の人々がもっとも大切な願いはどのようなものであるかわかる。まず、本主は稲作を生業とするペー族

にとって、「風雨の順調」(^{フォンティヤオユースン}「風調雨順」)を祈る神であり、村を守り、家庭の暮らしの「安寧息災」(^{チンジーピンアン}「清吉平安」)を司る神でもある。このほか、生活に欠かすことのできない大切な役割をもった神



写真5 毎月1日と15日は家庭の平安無事を願って神々を祭祀する。中庭で紙銭と紅紙の「永保平安」を燃やす。紅河彝族哈尼族自治州建水県团山村にて。



図1 「本境土主」大理州巍山彝族回族自治县南诏鎮 白紙墨刷-15.5cm × 13.2cm



図2 「田公・地公」大理州洱源县江尾郷 雑紙墨刷-13.2cm × 12.0cm



図3 「水草大王」大理州大理市上関九社村 雑紙墨刷-14.8cm × 11.3cm

として、夫婦一組の田の神である「田公地母」は「五穀豊穰」(「五穀豊登」)を司り、「財神」は「商売繁盛」(「生意興旺」)を司り、男性が外地に行商に出ることの多いパー族には重要な神である。また、家畜の守護神として牧草地の神である「水草大王」がおり、「家畜の繁栄」(「六畜興旺」)を祈願し、子宝と子供の成長無事を祈る神として、「子孫娘娘」(「娘娘」は女神を指す)は「子孫繁栄」(「人丁興旺」)を司る。これらの神々の神前には祭卓があり、ここに神像版画を奉納し、あわせて線香や赤・緑・黄色のあられなどを捧げる。また、神に捧げる願文もあり、紙函に入れてから廟堂内の中庭にある金炉と呼ばれる炉で燃やす。

年中行事 (図4・5・6)

雲南省の神像版画は、四季を通じて年中行事に使われている。主な年中行事のなかでも、春節(旧正月)・清明節(墓参の節句、新暦四月初前後)・端午節(旧暦五月五日)・中元節(日本の盆に相当する祖霊祭祀。旧暦七月初から半ばまで)・かまど神送り(旧暦十二月二十三、四日)など、内

地の漢族が過ごす代表的な節句は、雲南の漢族もパー族も過ごす。パー族は本主の誕生祭である本主節が、各村それぞれにあり、また、財産の神の縁日である財神会を、旧暦八月三日に財神廟で行うなど、各地方独特の年中行事もある。

新年を迎える春節の行事に限っても、多種多様な神像版画が使われる。神々たちのダイナミックな移動が天地を結んで行われるからである。歳の暮れに天上に登っていったかまど神は、年が明けると天界の神々を連れて地上に降臨するが、中庭の壁面に天上、地上の神々を祀る神棚があり、ここに天地の神々を描いた「天地三界」(昆明市)「三界神威聖神総真」(大理州大理市)などの神像版画を貼って神々を出迎える。神々を迎える前には、家の門を守る門神に対して線香を捧げ、門神の版画を紙銭とともに燃やし、神々と先祖の霊が家に入るのを妨げないように祈る。門神の祭祀は旧暦七月一日に、先祖の霊が冥界から帰宅する際にも行われる。

また、雲南省西部の保山市隆陽区では、年越しの際に、「太歳五(悪)作」「七煞」「勾絞」「病符」



図4 「三界神威聖神総真」大理州大理市太和村 白紙墨刷-22.0cm × 17.3cm



図5 「勾絞」保山市隆陽区板橋鎮 雑紙墨刷-13.6cm × 10.2cm



図6 「送歳」大理州祥雲県祥城镇 雑紙墨刷 -13.7cm × 10.6cm



図7 「車馬」大理州祥雲県祥城镇 紅紙墨刷 -13.0cm × 10.8cm

など、さまざまな悪鬼凶神を描いた神像を燃やして祓う。

大理州の祥雲県では、年越しの際に、家の隅々までくまなく掃除したごみを門外に掃き出すが、そのときに「送歳」という年神を描いた版画を燃やす。それぞれの年ごとに担当となる「値年太歳」という年神の交替を象徴する神像である。

祭祀儀礼での使用 (図7・8)

祭祀儀礼で使われる神像は、たとえば家の建築の際に使われる版画として、「居屋木気之神」などと呼ばれる神像版画があり、棟上げの前の晩に門外で燃やすが、家屋そのものを描いており、珍しい図柄である。この行事を「送木神」(大理州大理市) (「木の神送り」) といい、家の建築に使われる木材そのものを祭祀し、供養する意味を表している。また、婚葬祭や子供の誕生、成長などに使われる版画も多く、婚礼で花嫁が新郎の家に嫁入りする際に、花嫁の乗る輿の神である「五方車馬神君」(大理州大理市)「車馬」(大理州祥雲県)を門前で祭祀したり、葬式で出棺の際に、死者の



図8 「雄雌殺神」大理州大理市太和村 白紙墨刷 -13.5cm × 15.5cm

靈魂の変化である鶏頭人身の凶神である「雄雌殺神」(大理州大理市)を燃やす。いずれも現代に残る神像版画として極めて珍しい。また大理白族自治州巍山彝族回族自治県の漢族は、子供の成長

に際して出会う危険を24の関門に見立て、関門を司る悪鬼たちを描いた「関煞紙」があり、危険をあらかじめ祓う関門くぐりの儀式である「過関」に使う。成長の際のさまざまな危険についての人々の考え方が一目瞭然となった興味深い版画たちである。

消災祭祀 (図9・10・11)

日常生活に起こる不幸や不運、病気などの悪事には、その背後にさまざまな凶神悪鬼たちが活動しているとされる。雲南省の甲馬子は、このような災い祓い(消災祭祀)のための神像版画が極めて多いことが特徴である。たとえば、難産死した婦女であり、妊婦に祟る「血腥女魂神位」(大理州大理市)や、天上にあって地上に降りて子供を病気にする犬精である天狗を描く「天狗之神」(大

理州洱源县)「天狗」(保山市騰衝県)やフクロウの妖怪変化である「梟神」(大理州巍山彝族回族自治县)、あるいは人にとり憑き、口の災いを引き起こす虎の精である「白虎」も雲南各地にみられる。また、特定の家庭に養われているとされる動物精、毒虫の精である「蠱」は、子供の身体に侵入して内臓を喰らったり、脳を喰らうとされて少数民族と漢族との違いを問わず雲南の人々に怖れられているが、これらを描く神像が各地にある。両手に鎌首をもたげた蛇を持つ神人を描くもの、羽根を生やした男女の蠱神を描くもの、人の頭に蛾の身体と羽根をもつもの、目を見開き、怪しげな眼光を放つ羽根を持った蛇神の姿など、これらは人々の心深くに怖れをもって信じられてきた奇々怪々な妖物たちである。これらについては拙著『中国の〈憑きもの〉—華南地方の蠱毒と呪術的伝承』を上梓したので参照されたい¹⁶⁾。



図9 「血腥女魂神位」大理州大理市鳳儀鎮 紫紙墨刷
-26.4cm × 15.8cm



図10 「天狗」保山市騰衝県騰越鎮 - 棉紙墨刷 -10.5cm
× 6.7cm



図 11 「月牙昇」昆明市官渡区 (高金龍氏提供) - 白紙墨刷 - 16.5cm × 13.5cm

むすび (写真 6) (図 12)

雲南の神像版画は、人々の口から語られることが稀な秘めたる信仰の世界をも描いている。そこに描かれた無数の神々は、穏やかな生活とそのささやかな向上を願い、家族の幸せを願う人々の願いの数々であり、人が心に抱きうるあらゆる「思い做し」の一つ一つでもある。そのなかには、呪わしい祟りをもたらす悪鬼や妖物など、禍々しい、戦慄すべき鬼像も含まれている。雲南の神像版画の本当の価値は、人々が敬虔な祈りを捧げ、あるいは畏怖してきた神鬼たちの姿を、人々の脳裏に描くままに図像にしていることであろう。甲馬子に描かれた数々の神像は、けっしてすました顔はしていない。彼らは、笑い、泣き、怒り、踊るのである。それらは雲南の人々の願いの有様を、喜怒哀楽を伴った姿で、極めて直截的に我々に伝え



写真 6 出発前に「車神」の版画を出発する方角に向けて燃やす。保山市隆陽区永昌鎮にて。写真は大理古城出身の私の妻(右)と姉(左)である。



図 12 「車神」保山市隆陽区板橋鎮 雑紙墨刷 - 15.8cm × 11.1cm

てくれる。

雲南省の神像版画は、今日なお人々の手で製作

されつづけ、その内容も日増しに増えている。近年では中国経済の急速な繁栄のもとに、一層多様な祭祀の必要が増しているのであるが、雲南省西部の保山市一帯や南部の建水県では、〈車神〉と呼ばれる交通安全の神を描いた版画が1990年代中頃より新たに登場している。自動車やバイクを買った人が、納車後に車の前でこの種の版画を燃やしたり、旅立ち前に道中の無事を祈って燃やしている。当面は雲南省の甲馬子は人々に使われつづけていくと思われる。私自身は重慶・四川・貴州各市省に財神やかまど神などの神像版画が分布しているので、西南地方全体に調査の手を広げているが、現在のメインテーマである西南地方の古鎮（歴史的景観を残す古街）の調査・記録研究と平行して現地調査を継続している。雲南省でも中部・東部になお未調査の神像版画がある。私自身のライフワークの1つとして、今後も続けて調査していくつもりである。

附記

本稿は、那須塩原市那須野が原博物館で2007年春に開催された『春節の祈り 中国・年画と紙馬の世界』展の図録解説論文、川野明正著「雲南省の紙馬類〈甲馬子〉—中国伝統祭祀版画の世界」に基づき、大幅に改稿・加筆したものである¹⁷⁾。

注

- 1) 川野明正——2005『神像呪符「甲馬子」集成——中国雲南省漢族・白族民間信仰誌』大阪：東方出版, 18頁
- 2) 入矢義高・梅原郁（訳注）・（宋）孟元老（著）——1996『東京夢華録——宋代の都市と生活』東京：平凡社, 231-232頁
- 3) 王樹村——1992『中国古代民俗版画』北京：新世界出版社
- 4) Day, C.B. —— 1940 *Chinese Peasant Cults —— Being a Study of Chinese Paper Gods*, Shanghai: Kelly and Walsh Limited, p.5
- 5) 陶思炎——1996『中国紙馬』台北：東大圖書股份有限公司, 10頁
- 6) 川野明正——2005「天翔る馬——中国馬像呪符をめぐる民俗」『東京理科大学紀要（教養篇）』第37号：221-223頁
- 7) 蘇素卿——1999「台湾漢族における祭祀活動と紙製品の研究——主に金銀紙を中心にして」『比較民俗研究』第16号, 筑波大学比較民俗研究会：87頁
- 8) 岩井宏実——1997『絵馬』東京：法政大学出版局, 3-27頁
- 9) 狩野直禎・西脇常記（訳注）・（後漢）班固（撰）——1987『漢書・郊祀志』東京：平凡社, 149頁
- 10) 永尾龍造——1940『支那民俗誌』第1巻, 東京：支那民俗誌刊行会, 253-265頁
- 11) 出石誠彦——1943「天馬考」『支那神話伝説の研究』東京：中央公論社：194頁
- 12) 吉田隆英——2004「紙馬の研究——東アジアにおける宗教的印刷物の発展・流通と神の使者としての馬」磯部彰編『東アジア出版文化研究——にわたり』東京：二玄社：375頁
- 13) 李偉卿——1988「大理甲馬与白族民間諸神」『雲南民族学院学報』33頁
- 14) 趙寅松・楊郁生編——2007『中国木版年画集成——雲南甲馬卷』北京：中華書局, 415頁
- 15) 金井忠夫（編）——2007『春節の祈り 中国・年画と紙馬の世界』那須塩原：那須塩原市那須野が原博物館, 122頁
- 16) 川野明正——2005『中国の〈憑きもの〉—華南地方の蠱毒と呪術的伝承』東京：風響社
- 17) 川野明正——2007「雲南省の紙馬類〈甲馬子〉—中国伝統祭祀版画の世界」『春節の祈り 中国・年画と紙馬の世界』那須塩原：那須塩原市那須野が原博物館, 77-84頁

Summary

Jiamazi — about Chinese Folk Iconographical Charm in Yunnan

Akimasa Kawano

Meiji University

This thesis describes a kind of folk iconographical charm called as Jiamazi (甲馬子) of Yunnan in China.

Jiamazi is used for prayer to various God, in case of many annual events and each folk religions service.

This kind of prints is an important tool of the folk belief. They are burned and changed into smoke for praying to God and many evil and good spirits. It has been called as Zhima (紙馬), Shenma (神馬) and Jiamazi (甲馬) in other provinces, widely pervaded among various places. In some places, for example, Zhima means paper (紙) and horse (馬). This kind of prints accompanies with the names of horse. It contains important meanings, because the horse connects with between Gods and human being. Consequently, the horse symbolizes the character as media.

Now, this kind of print disappeared in almost many places of China, by the extermination movement, for example, the “posijiu” (破四旧) and the “cultural revolution” (文化大革命), etc, against so called “feudalism superstition” (封建迷信) after People's Republic of China founded. Because it was considered to contain harmful thought and old custom by government.

But, Jiamazi is not only still using now in Yunnan province, but also has most various contents in China.

This thesis writes not only about historical origin and meaning of Chinese iconographical charm and Jiamazi charm, but also investigation report on Jiamazi, there are classified into four parts according to the purpose of use, that is, 1) praying to gods in daily life, 2) The annual events, 3) Religious service in Prayers house, 4) purification of disasters.